

「ありがとう」

岐阜市立精華中学校 3年

渡邊 心乃

私には、離れて暮らす曾祖母がいます。年は今年で94歳。1年前までは元気に自宅で暮らしていましたが、今はグループホームと呼ばれる介護施設に入って暮らしています。施設に入る前は、楽しそうに畑をしたりランチを食べに行ったりと、元気に日常を過ごしていましたが、今はこれまでの暮らしとは全く違う暮らしをしています。1年前、レビー小体型認知症と診断されたのです。レビー小体型認知症とは、妄想を激しく起こしたり、睡眠障害を起こしたりする認知症のことです。私は、あんなに元気だった曾祖母が認知症だなんて信じられませんでした。でも、曾祖母の認知症は進んでいき、家族で相談した結果家での生活は困難なので、介護施設に行くことになりました。

皆さんは、介護施設というとどんなイメージを持ちますか？私は、高齢者の方々が何不自由なく楽しく暮らせるイメージがありましたが、実際には違いました。施設は、安全に不自由なく暮らせるようになっており、お風呂や食事にも困りません。でも、家族との面会が制限されていたり、自由に外出することができません。曾祖母は大丈夫だろうか。そう思った私は、少しでも元気を出してもらいたいと思い、面会に行きました。月に1回ほどでしたが、会えた時はホッとしました。

でも曾祖母は私に、「もう少しだけ家で暮らしたかった。」と淋しそうに言うのでした。きっと曾祖母は、もっと家で畑をしたり、家族とご飯を食べに行ったりしたかったのだと強く感じました。と同時に、私は後悔の念でいっぱいになりました。たとえ、認知症になっても、曾祖母は家族と一緒にいたかったのだと感じたからです。施設に入る前から、部活や塾などで忙しく、曾祖母に会えたのは3カ月に1回程度でした。だから、もっと会えたら、もっと話せたら曾祖母の笑顔がみれたかも知れない。そう思いました。それから私は、祖母と一緒に何回か施設を訪ね、面会をしました。介護施設に行くのは、なかなか慣れず、ドキドキしましたが何より、曾祖母に会えることが嬉しかったです。施設に着き、曾祖母と話すときは、少しでもたくさん話そうと思いました。他愛のない話をしたり、小さい頃の思い出話をしたり…。中学校での出来事などもたくさん話しました。会った当初はどこか淋しそうにしていた曾祖母も話していくうちに少しずつ笑顔になってくれました。つまらない話でもニコニコと笑ってくれて、私まで元気をもらいました。でも、面会には制限があるので、そう長くはいられませんでした。が去り際、曾祖母に「今日は来てくれてありがとうね。すごくうれしかったよ。本当にありがとう。」という言葉がもらいました。その言葉に私は、思わず涙が溢れました。少しでも元気を出せてもらえたら、そう思って会いに行った私の方が、元気をもらえた気がしたのです。

私は、曾祖母の「ありがとう」に気付かされたことがあります。それは、何気ない日常が突然変化しても、自分に素直になれる言葉それが「ありがとう」だということです。そして「ありがとう」の一言で、元気や勇気をくれた曾祖母のように、日頃から感謝を伝えられるようにしたいと強く思いました。だから、曾祖母のように元気で勇気を与えられる「ありがとう。」を大切に歩いていきたいです。